

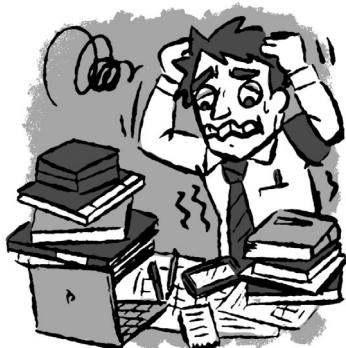
「捨てる」という行為は、単に物を片付けることにはなりません。過去のしがらみを断ち切り、未来へ向かうための決断もあります。

Mさんはこの「捨てる」実践をしたことで、業務の効率が劇的に改善しました。かつてMさんのデスクは、小さな物置のようでした。完了したプロジェクトの書類、保管していた企画書の草案などが山積みになっていました。資料に囲まれたその空間を「忙しさの証」として、むしろ誇らしく感じていたといいます。

しかし、デスクが煩雑になるほど、思考も散漫になっていきました。情報の取扱選択ができず、判断力が鈍り、業務にも影響が出始めたのです。

Mさんは不動産会社の営業マンとして働いており、多くの物件を見てきました。特に、家賃滞納などにより夜逃げ同様で退去した住人の部屋の片付けを任されることが多かったです。この作業を続ける中で、ある一つの事実に気づきました。それは、そうした部屋は例外なく綺麗ではないということです。

どの部屋も、不要な荷物、使われなくなった私物で溢れていきました。生活が破綻した状態を象徴するような空間でした。乱雑さは、住人が日々の生活や変化に対応できず、人生の停滞を受け入れてしまつたかのように見えました。彼らは「今」の自分にとつて不要なものを「捨てる」という決断を拒み続けていたのです。



乱雜な空間が語る 停滞と再生のビジネスストーリー

この光景を見たとき、Mさんはハッとさせられました。自身のデスクの惨状、そして仕事に対する停滞感は、退去者のとしたのではありません。自分の周りにある無駄な物を放置することは、「現在」の活動を妨げ、「未来」への適応を拒否していることに他ならないと悟ったのです。

Mさんは、デスクの整理から着手しました。一つひとつの書類を取り、「本当に今、必要か?」と自問しました。不要な書類は、ためらいなく処分しました。すると、物理面だけでなく、精神面にも変化が訪れました。デスクが綺麗になるにつれて、心が軽くなつたのです。

次に、Mさんはチームの共有スペースに目を向けました。不要な掲示物、古くなつた備品。それらを撤去し、必要なものだけを残しました。

「捨てる」という実践をしたことで、Mさんは常に「最適化」された状態を保てるようになりました。目の前の業務に集中し、現在の課題に真摯に向き合うことができるようになりました。目の前の業務にこの変化は、Mさんの仕事への姿勢そのものを変えました。チーム全体にも波及し、無駄を削ぎ落としたことで、常に新しい挑戦を続けるようになりました。

「捨てる」という行為は、単なる片付けではありません。過去の遺物を手放し、「現在」に集中するための、最も重要なそして覚悟が伴なう判断なのです。